

評熱病論 第三十三

因
陰陽交

黃帝問曰。曰く。温と病と有る有り。汗出を^{はら}輒と復た熱一と。脈は躁。疾にも。汗者^はい^はる^は為^すす。狂言^と食^ふ能^は出^ず病。名^の之^を何^と為^すか。岐伯對^{して}曰^く。病^を解^ける^は陰陽交^と交^は死^す也。中^に極^むる^は其^の説^と聞^{かん}と。岐伯曰^く。人^の汗^は出^づる^は所以^は皆^が穀^に生^じじ。穀^は精^に生^ずお。今^は邪^氣。骨^肉於^て交^{わり}争^ひて汗^を得^るは。是^れ邪^が卻^つる^は精^が勝^つ也。精^が勝^つは則^ち當^に能^く食^はんと。熱^も復^さず。復^た熱^{する}は邪^氣也。汗^は精^氣の^出出^る者^也也。今^は汗^出て輒^ち復^た熱^{する}は是^れ邪^が勝^つれ^る也。食^ふ能^はざ^る者^は精^の俾^ふ無^さ也。

三十三一

因
風厥

(病) 熱一と留^る者^は、^{この}毒[、]主^とい^ふに煙^すべ^る也。且^つ夫^れ熱^論に曰^く。汗^出て脈^尚ほ躁^盛なる者^は死^すと。今^は脈^と汗^と相^い應^せざる^は、此^れの^病に^勝た^{ざる}也。其^の死^{する}は明^の也。狂^言する者^は、是^れ志^を失^へり。志^を失^ふ者^は死^す。今^は三^死と曰^ひり。一^と五^と見^はざる^は、愈^の中^にと雖^へも、必^ず死^す也。而^も曰^く病^有り^と身^熱一^と汗^出て煩^満り。煩^満す^れば汗^解くる^は爲^さざる^は、此^れ何^の病^爲す^の也。岐伯曰^く。汗^出て身^熱する^は風^有り。汗^出ても煩^満し解^けざる者^は厥^有り。病^を解^ける^は風^厥と曰^ふ。而^も曰^く。願^はく^は、卒^に之^を聞^{かん}と。岐伯曰^く。巨^陽は氣^を主^ふ以^て足^が邪^を受^く。少^陰は其^れと

三十三一

四

與に夜裏と為す也。熱を得山は則ち上り之に縦り之に縦り
は則ち厥すま也。帝曰く之を治すは奈何。岐伯曰く表裏之を
利し之に服湯を飲ませよと。

帝曰く苓風の病を為す也何如。岐伯曰く苓風の法は

肺下に在り。其の病を為す也。人をして強上せしめ。壅出づる

と涕を君。惡風之振寒す。此れ苓風の病實視と云ふ也。

帝曰く之を治すは奈何。岐伯曰く以て尻仰を救ひ。巨陽を

精に引けは三日。中平なれば五日。精なれば七日に之を效す。

青黄の涕痰出づ。其の状は膿の如く。大さうは群丸の如き。

口中君。君しは鼻中君。滌り出づ。出づるは則ち肺を傷ふ

三十三一三

肺を傷ふは死す也。

(譯)

帝曰く青風と病む者有り。面腫し。悉然なり。言に壅塞す。

利す可きや否やと。岐伯曰く。虚すは利す當からず。利す當から

ざるに利せば。後山よこす五日に之。其の氣止り至らん。帝曰く。其の

至るは如何と。岐伯曰く至るとは止り少氣し。時に熱あり。時に

熱あり。今月背從り上りて頭は汗出づ。手熱く。口乾す。

渴す苦し。小便黄し。目下腫れ。腹中鳴り。身重く以て行か

難し。月事來れ不順し。食不能は實。正便す能は實。正便すれ

ば效す。病を治す風水と曰ふ。論は利法中に在り。帝曰く。願

はくば其の強を聞さんと。岐伯曰く。邪の攻る所。其の氣は必す

風水
可の三期

四

單風

四

單風

四

三十三一四

正氣

虚也。陰虚の者は陽火が之に炎を以て少氣しと時に熱し。而して汗出づる也。小便重なるは少腹中に熱有る也。正遷する能はるは日月中和する也。正遷するは則ち效を得る。一甚一とは。上りの肺に道る也。諸る水気は、微の腔の及ぶ目下に見はるる也。而して何と以て言ふ。と岐伯曰く、水者陰なり。目下もよる陰也。腹は至陰の居る所、以て水、腹に在るは、必し目下と腫る便する也。真氣を上逆す。故に口苦く、舌乾く、取すも正遷するを得ず。正遷するは則ち刻し、瀉水を出すなり。瀉水の小病は、取すを得ず。取せば則ち怒り、怒りば則ち刻甚しと也。腹中鳴るは、病者月本つけ也。脾に瀉水は

三十三、五

則ち煩し、食不能はす。食ふると下するは、日月腹脹す也。身重く行く難しとは、胃脈足に在る也。月事来らばとは、胞脈閉る也。胞脈は心に属し、胞中に絡ふ。今、氣上りて肺に道るは、心氣は下り通ずるを得ず。故に月事来らざる也。命は、善しと。

三十三、一六